



臨床と経営に活かす院内医療データ およびビッグデータの新しい活用法

地域に合った医療機能を提供しつつ、安定した病院経営と医療の質向上を目指すために、今必要な分析は何でしょうか？
本セミナーでは、現状の課題を踏まえた院内医療データの新しい活用視点とその方法、さらには医療ビッグデータを解析して
フォーミュラ策定に活かした事例について、お話いただきます。

開催日 2021年 **7/21** 水 時間 **13:00~13:50** **LIVE 配信**
2021年 7/15 木 ~ 7/30 金 **オンデマンド配信**

共催 第23回日本医療マネジメント学会学術総会／株式会社JMDC

視聴方法 第23回日本医療マネジメント学会にご参加いただき、
参加者ページよりご視聴ください。

第23回日本医療マネジメント学会
ホームページ



座長



芦原 教之氏

あしはら のりゆき

医療法人沖縄徳洲会
湘南鎌倉総合病院 事務長

医療データ分析ラボ
代表・医療データサイエンティスト

演者1 **中村 敦氏**
なかむら あつし



講演タイトル

医療の質向上と病院経営の安定化を
目指した院内医療情報の有効活用について

昭和大学 統括薬剤部
薬学部病院薬剤学 准教授

演者2 **百 賢二氏**
もも けんじ



講演タイトル

医薬品フォーミュラ策定に
応用する医療ビッグデータの活用

演者のご講演内容について

医療データ分析ラボ
代表・医療データサイエンティスト

演者 1 **中村 敦** 氏
なかむら あつし



講演タイトル

医療の質向上と病院経営の安定化を 目指した院内医療情報の有効活用について

現在、2025年以降の医療供給体制の構築を目指した地域医療構想が策定され、構想区域内の医療機関では診療機能等の医療供給体制の再検討を行い、医療の質も保ちつつ、安定した病院経営にも配慮することが必要です。その為に、まず自院の内外の状況を把握することが重要な鍵となります。

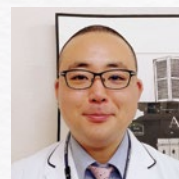
院外の状況は公開情報等を活用して、自院の地域医療上・医療レベル上・地理上の位置付けを把握し対応します。これとは別に、院内の状況は病院情報システム等の情報を活用して、疾患別や診療科別の入院・外来患者数や患者単価などの動向で受療患者の傾向から、自院の強み弱みを把握したり、看護必要度や在院日数などの指標により療養環境の確認を行って対応します。ただ、ほとんどの医療機関では状況把握と現状分析の必要性は理解できても、必要な情報抽出や分析方法が未確立であるか、人材不足等により実現されていません。このことから多くの医療機関で実装済みの病院情報システムから必要となる情報を抽出し、各種指標を分析し、病院経営や診療活動、保険請求等に活用できるシステムが必要になってきます。今回、実際の具体的な分析や分析システム等について、実例をあげながら述べていきます。

ご略歴

1978年 山口県済生会下関総合病院 就職
1997年 同病院 企画・建設対策室 主幹
新病院移転新築業務担当
病院情報システム構築担当
2014年 同病院 事務長 就任
2017年 山口県立総合医療センター 企画調整室長 就任
電子カルテシステム導入プロジェクト責任者
同 年 山口県立病院機構 経営企画室長 就任
2019年 医療データ分析ラボ 起業
同代表 医療データサイエンティストとして活動

昭和大学 統括薬剤部
薬学部病院薬剤学 准教授

演者 2 **百 賢二** 氏
もも けんじ



講演タイトル

医薬品フォーミュラリ策定に 応用する医療ビッグデータの活用

近年、診療報酬へ医薬品フォーミュラリ（使用ガイド付きの医薬品集）の導入の是非が議論されています。2020年度の改訂においては見送られたものの、医薬品費の抑制策の一つとして現在も継続的に検討が進められています。フォーミュラリ策定には、同一カテゴリ内の医薬品の有効性・安全性の差を評価することが重要であり、調査結果の再現性、真正性、透明性に加え、偏りのない情報を用いる必要があります。

私が所属する昭和大学では、8附属病院（3,200床）を有し、これらの薬剤部を取りまとめる統括薬剤部が中心となり、医薬品フォーミュラリの策定とディテリングを進めています。2年ほど前から、これまで策定した13カテゴリの医薬品フォーミュラリのリニューアルと、フォーミュラリ策定のための手順の標準化を試みてきました。骨子としては、1）システマティックレビューの手法に基づく同一カテゴリ内の医薬品の有効性・安全性の比較を目的としたHead to HeadのRandomized Control Trial (RCT) 論文の評価、および2）医療ビッグデータを用いた解析であり、それらのプロセスおよび議論の内容、成果を「医薬品フォーミュラリ報告書」として、関係者のCOIの状況も含めて開示しています。

フォーミュラリ策定に医療ビッグデータを活用することで、文献調査のみでは評価に必要な情報が十分に得られないという課題をクリアできる可能性が見込まれています。本セミナーにおいては、昭和大学で策定したビスフォスフォネート製剤のフォーミュラリ策定を例として、その策定プロセスと、医療現場における医療ビッグデータの活用についてお示しします。

ご略歴

2003年 筑波大学病院薬剤部
2014年 筑波大学つくば臨床医学研究開発機構
2016年 帝京平成大学薬学部
2018年 東京大学医科学研究所附属病院
2019年 昭和大学 統括薬剤部/薬学部

株式会社JMDCの医療ビッグデータをフォーミュラリ策定に活用した発表が、薬事日報で取り上げられました

【薬学会年会】臨床業務にビッグデータ・使用推奨薬選定の根拠に
<https://www.yakuji.co.jp/entry85896.html>

薬事日報
<https://www.yakuji.co.jp/>

お問合せはこちら

株式会社JMDC 医療機関支援事業本部
東京都港区芝大門2-5-5 住友芝大門ビル10階

Tel: 03-5733-5012

JMDC
● + × ◀